

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 10 月 6 日 10:21AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,500 円
(TOPIX) 3400～4200

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,000 ドル
(S&P500) 6300～7820

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～31,500
(ナスダック総合) 20,700～27,800

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～103.650

エリオット波動とは

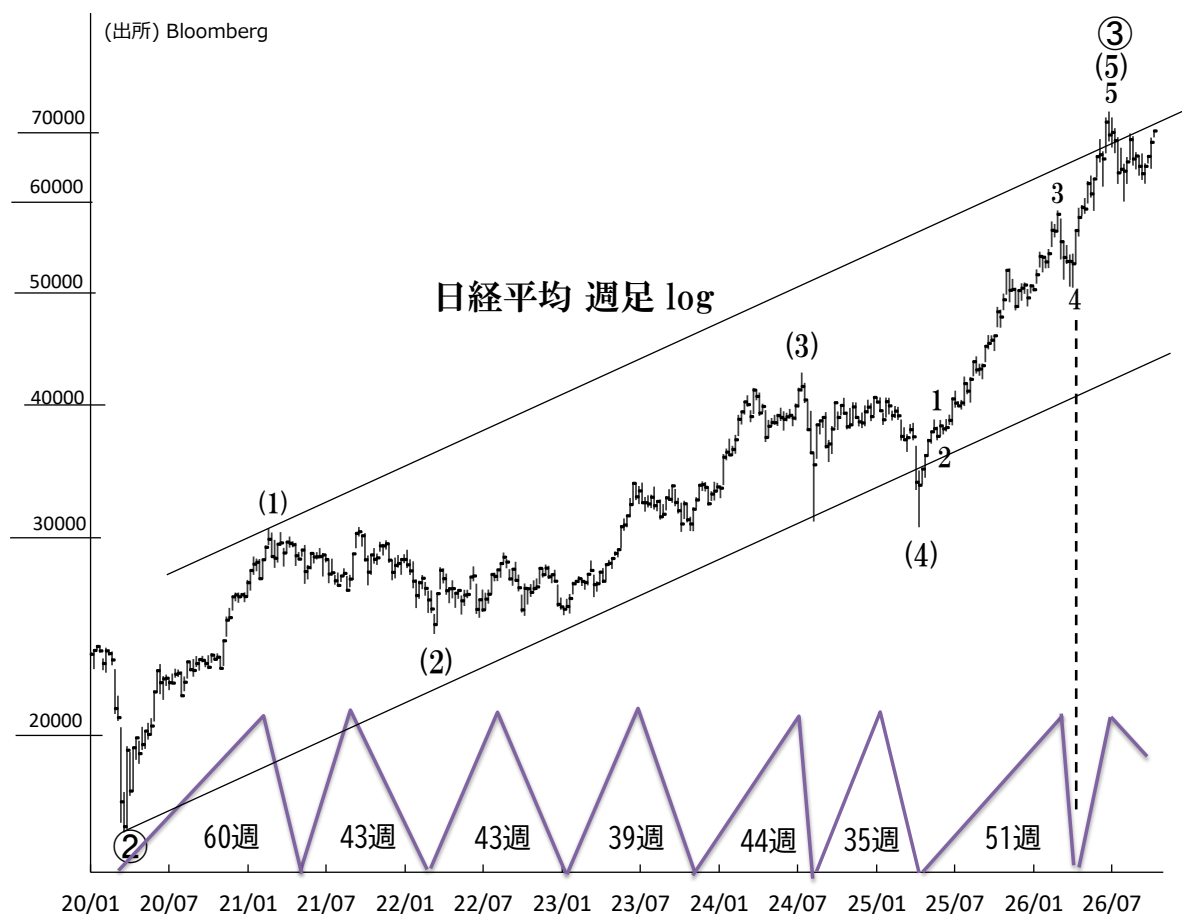
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22 高値)以来、プライマリー第④波の弱気相場が進行中とみています。

3 月末(50,558 円)から始まった現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きいでしょう(上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。

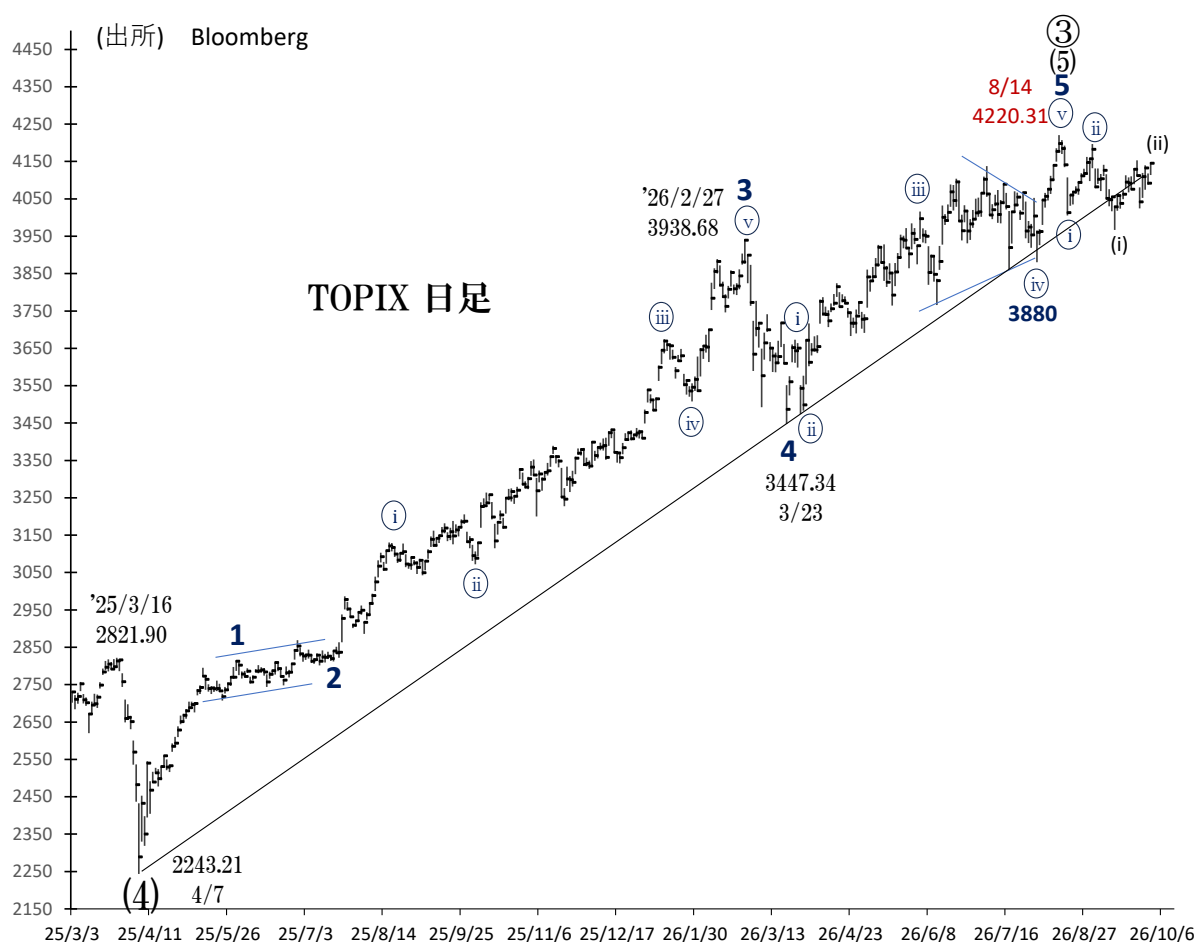
現行サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が予想されます。

「レフト・トランスレーション」のパターンでは、サイクル終点の安値がサイクル始点安値を通常は下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回るまで(※2)現行週次サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。今サイクル安値が 50,558 円未満であると仮定すると、現行サイクルの下げ率は 30%を超えることになる。



[TOPIX]

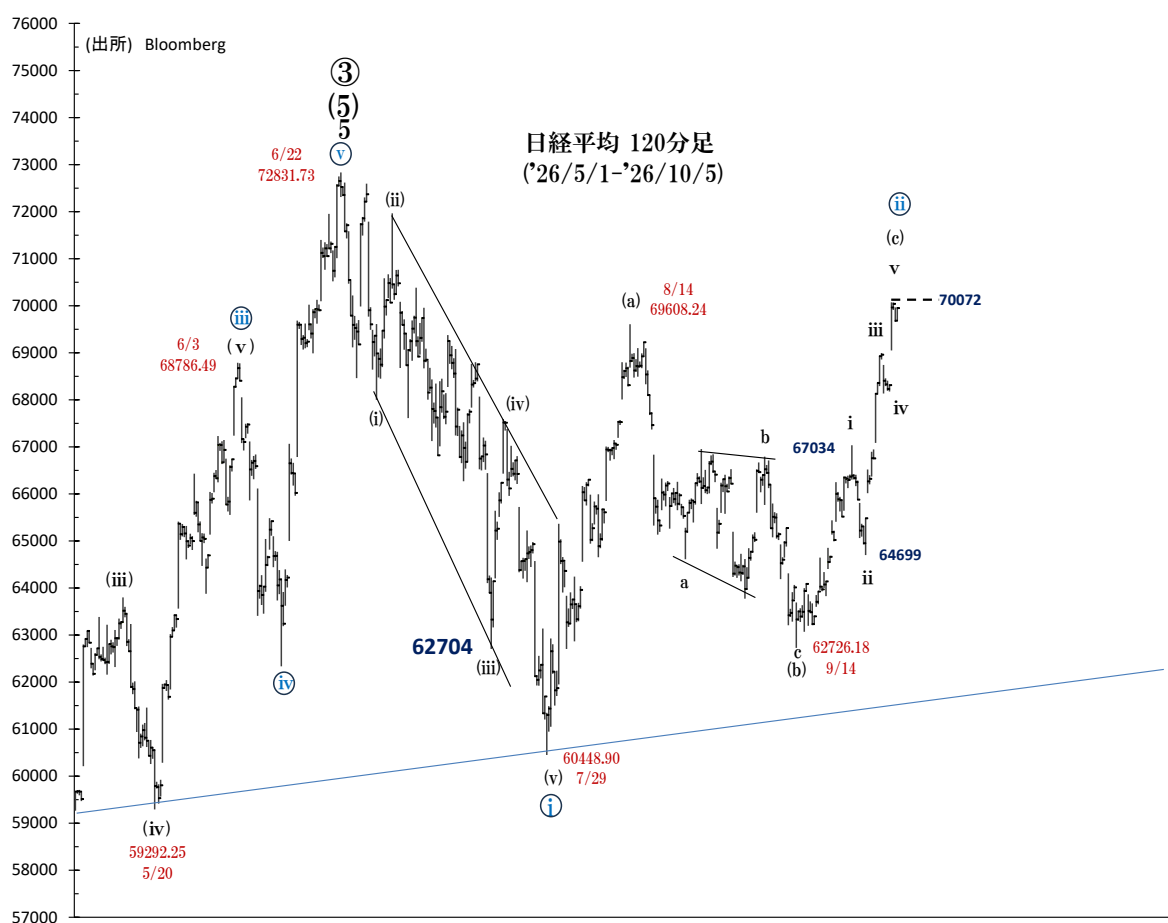
日経平均のプライマリー③波のピークは6月22日ですが、そこからTOPIXはおおよそ2カ月遅れ、8月14日に4220でピークを付けました(未確認による天井打ち)。

8月天井からプライマリー④波による調整が始まったとみられます。その調整規模は、プライマリー第②波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。

10月5日は一時4147.97まで上昇しました。

仮に8月高値からの下げを「One-two, one-two」とみれば、今週にもマル iii 波における第 iii 波(サード・オブ・サード)の強い下げがスタートするでしょう。それは3880(8/3安値)を早々に打診するでしょう。

反面4153(9/28高値)を抜くと、8月19日安値からのマル ii 波は「フラット」を形成していると思われます。マル ii 波完成後には、マル iii 波による下落トレンドが開始されます。



[日経平均・120分足]

6月高値から7月安値までの下落をマル i 波[リーディング・ダイアゴナル]、60,448 円(7/29 安値)からの上昇を(a)-(b)-(c)パターンによるマル ii 波として目先波動カウントを見直しました。62,726 円(9/14 安値)からの上昇は、マル ii 波の(c)波に位置付けられます。

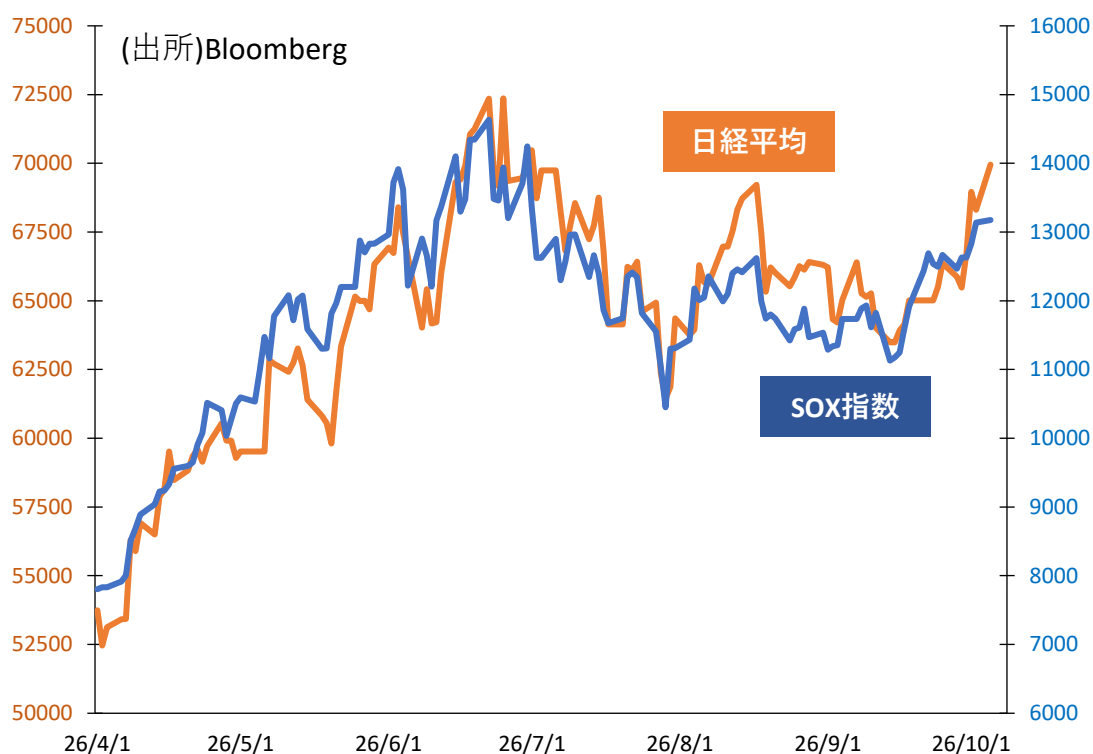
10月5日に一時3カ月ぶりに7万円を上回る場面がありました。マル i 波の下げに対し 78.6%戻り [70,181 円]に接近しています。

引き続き、物色は偏っています。この日、日経平均の上げ幅(1637 円)の半分超(847 円)が、わずか3銘柄(アドバンテスト、東京エレクトロン、ソフトバンク G)によるものでした。このような握りの値がさ株(AI・半導体株への)への集中的な物色は、日経平均が天井圏にあることをよく示しています。

日経平均と SOX 指数は目先のにも「二番天井」示現?

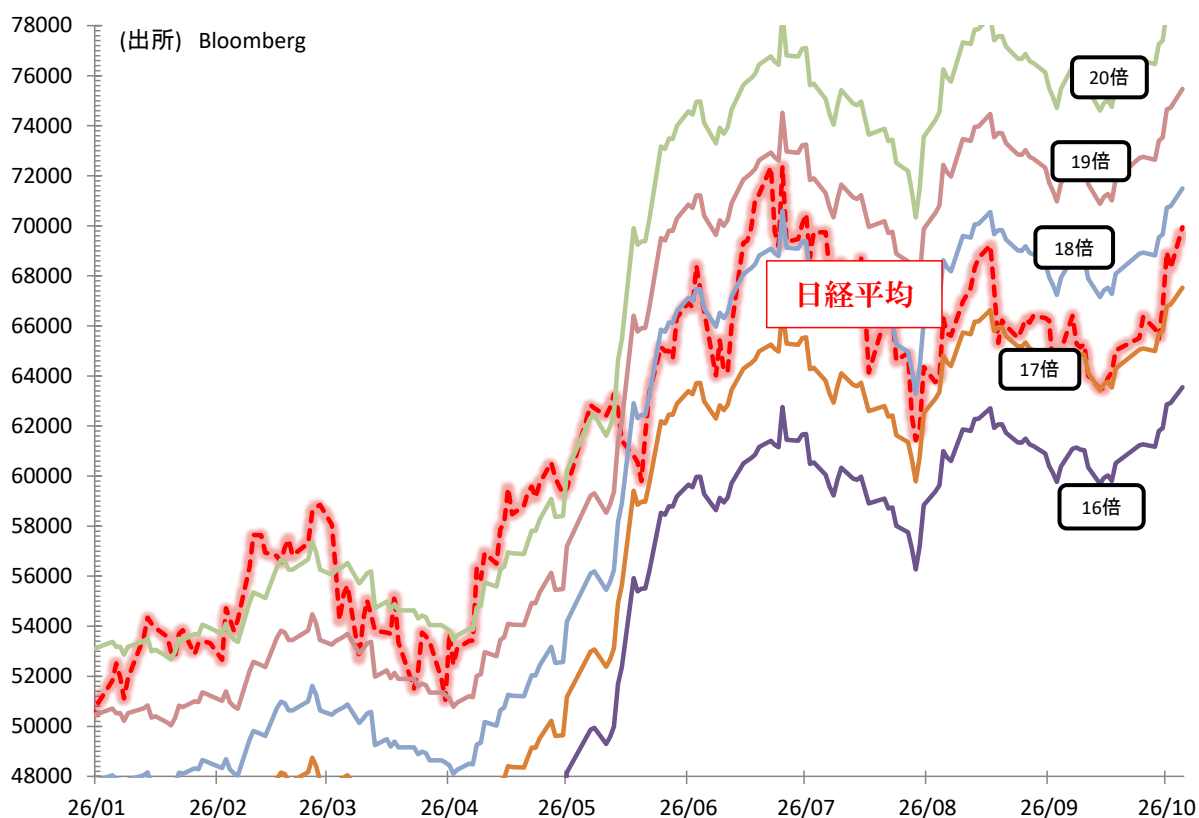
日経平均と SOX 指数には強い相関が認められます。

これら二つの指数が、6月の「一番天井」に次ぐ「二番天井」を短期的にも示現するかが注目されます。トレンドが上昇から下降へ転換すれば、日経平均と SOX 指数の両方が、7月安値を下回る展開に発展していくと思われます。

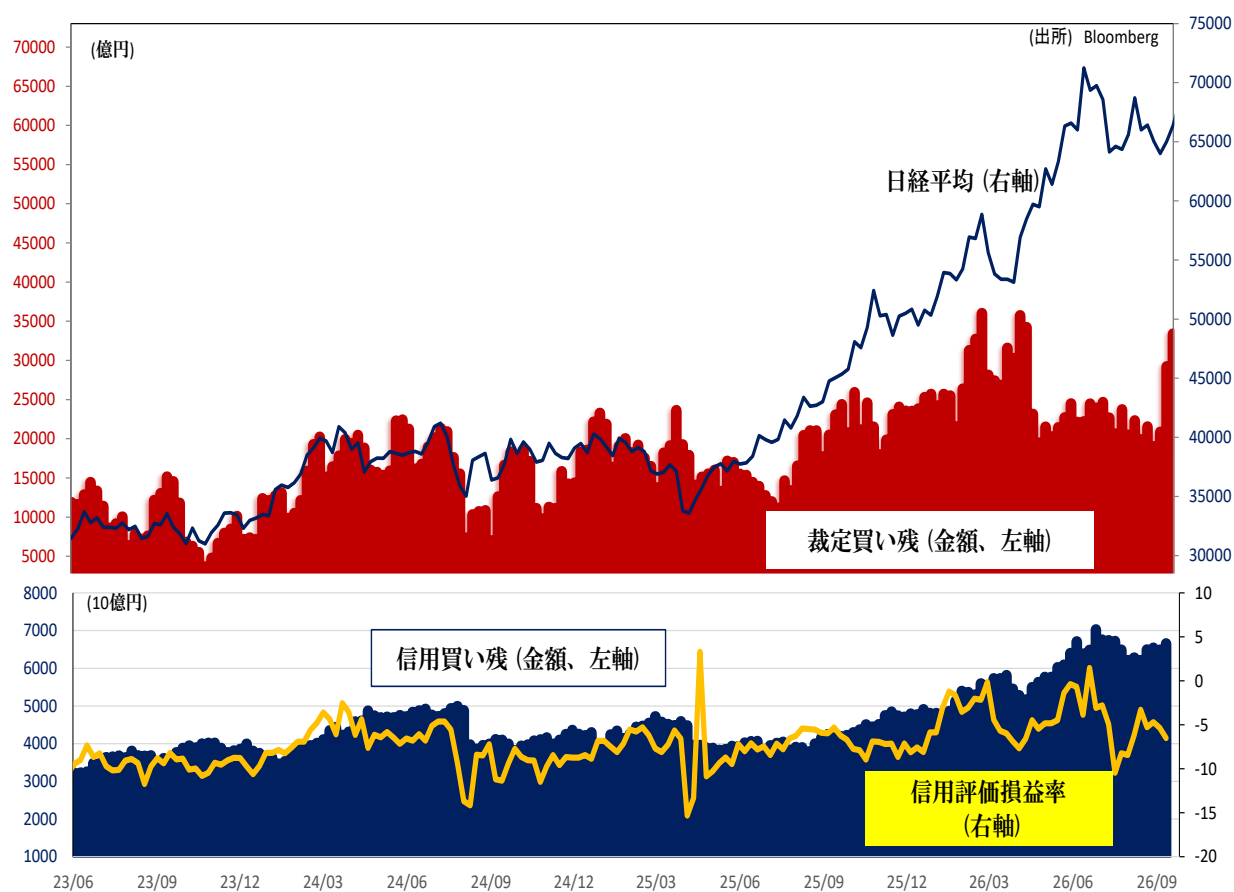


[予想 PER 別の日経平均水準]

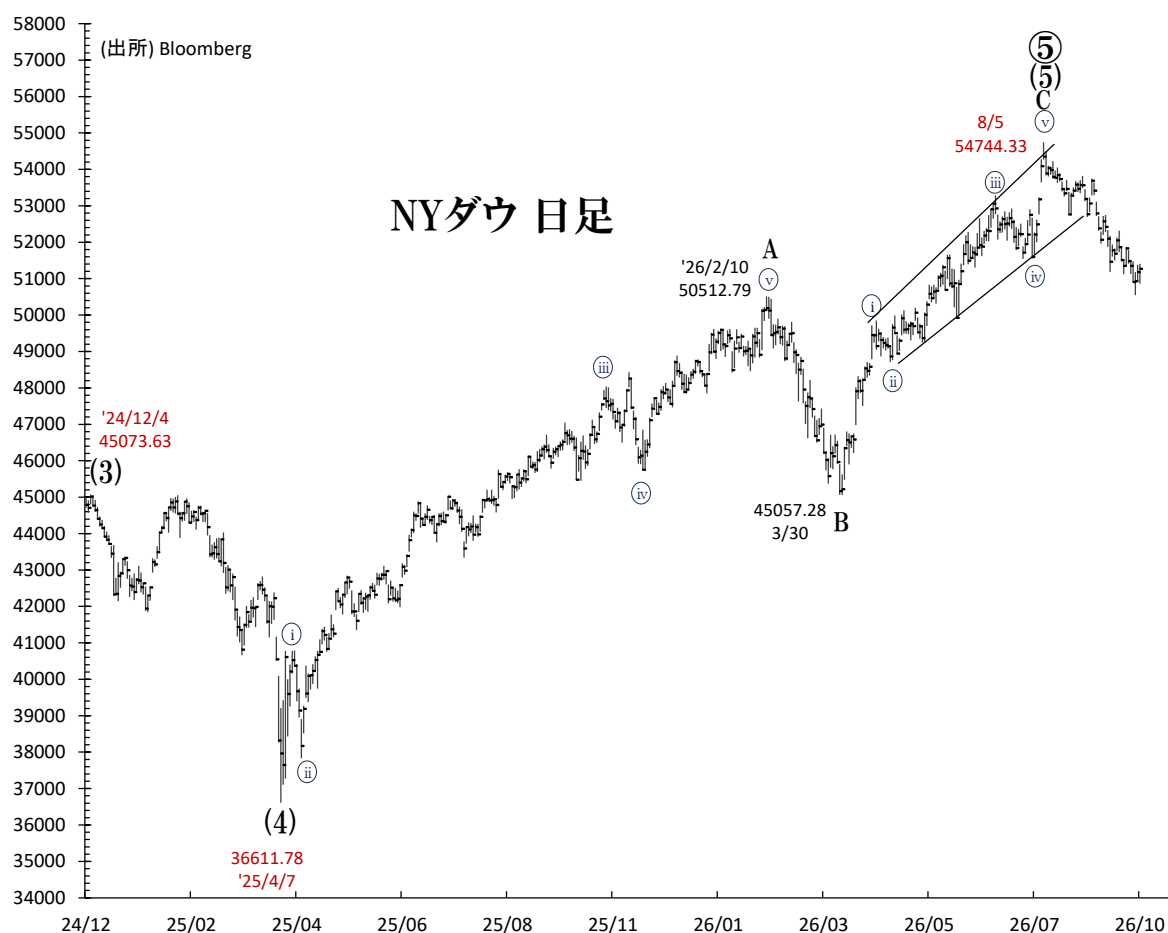
10月5日の日経平均予想 PER は 17.61 倍、予想 EPS は 3971 円(過去最高)。



[裁定買い残と信用買い残] (9月25日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

半導体株とAI関連株への集中投資により、ナスダック総合指数とナスダック100は10月5日にまたも最高値を更新しました。一方NYダウ30はまったく追従できていませんし、ダウ運輸株の足元安値は4カ月ぶり水準です。

NYダウは、4月下旬からの「メガホントップ」天井パターンから下放れが続いています。

当面の注目サポートレベルは5万ドル処。この付近に200日MA(50,290ドル)、3月からの上昇の半値押し[49,900ドル]などが存在します。

49,900ドルを割り込むと、3月からの上昇に対する61.8%押し[48,757ドル]を目指すことが想定されますが、より大きな弱気の可能性があります。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

10月5日、長期金利(10年)は一時5.3472%と約24年ぶりの水準に上昇し、実質金利(2.93%)は3%に接近しました。

一方、株価は最高値付近で推移し、VIX指数(恐怖指数)は依然として異例の低水準にあります。

多くの株式投資家が金利高を軽んじており、株式相場に関して過剰に楽観していますが、そんな状態はもう間もなく解消されるでしょう。

7816(8/13 高値)を以て、25年4月安値(4835)以来の一連の5波動構成は、すべて完了したとみられます。この見方通りなら、今後の下落リスクは—おそらく一般に思われている以上に—高いでしょう。

7507(9/16 安値)を下回るとダブル・トップが確認され、その後は下げ基調が強まるでしょう。次はレサードイグリー第4波安値の7313(7/29 安値)への下押しの動きが想定されます。

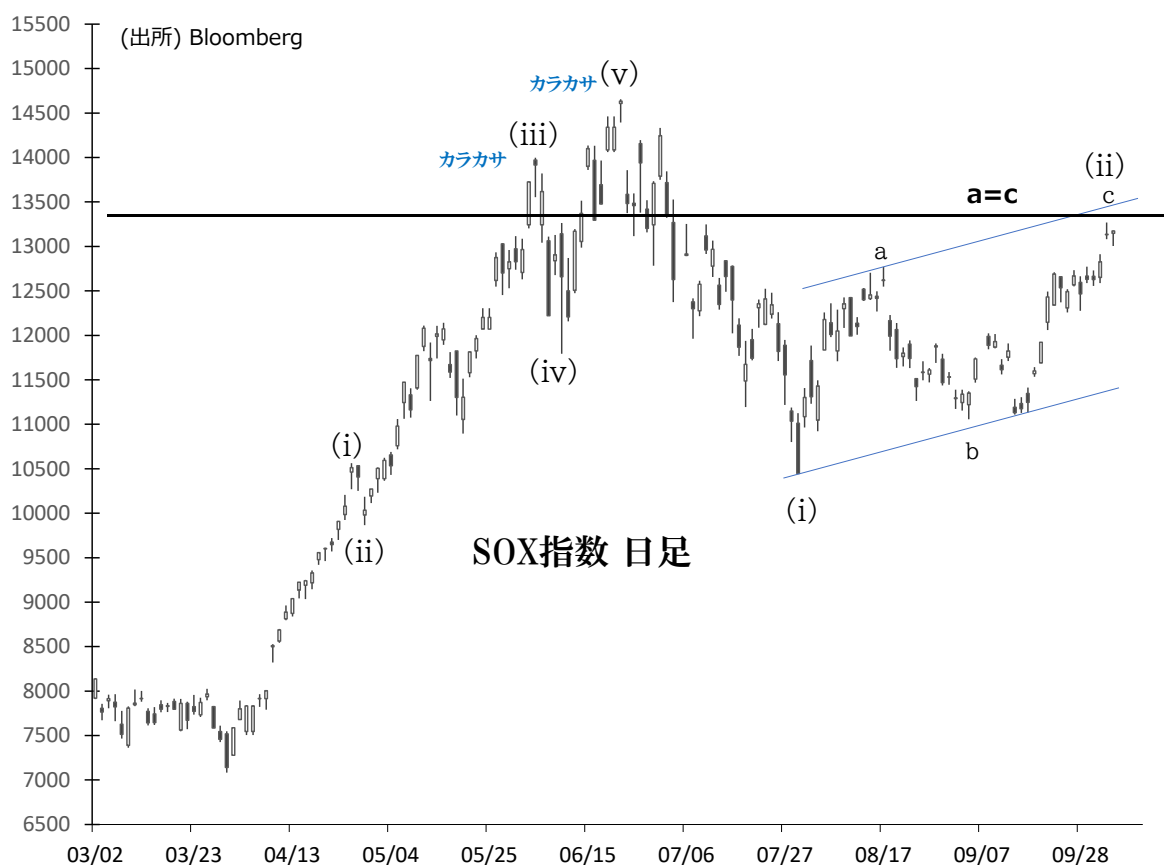
一方7816を上回ると、第(5)波の完成に向けて、短期波動カウントを見直す必要があります。

SOX 指数

7 月 29 日安値(10,445)からの上昇は、第(ii)波リバウンドとみられます。

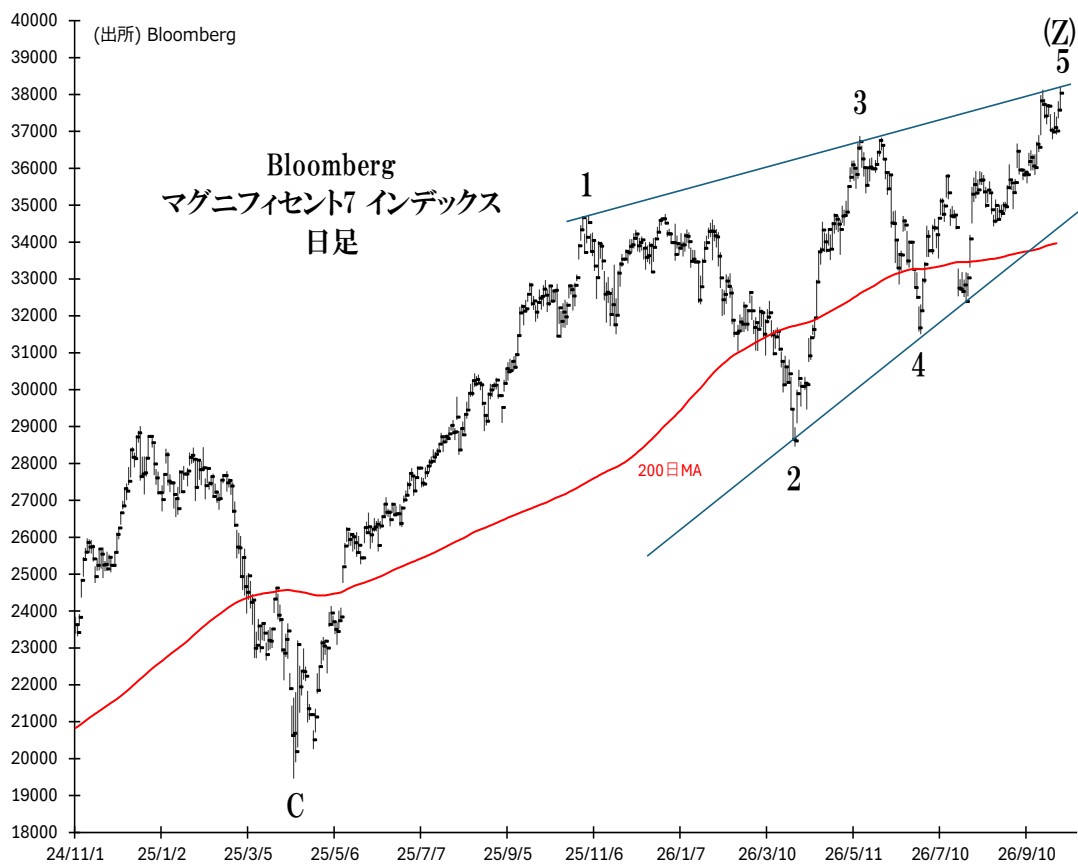
10 月 2 日には一時 13,269 と 3 カ月ぶり水準に上昇。第(i)波(6/22~7/29)の下げ 66%(3 分の 2) 戻り [13,252]を達成し、さらに第(ii)波の a 波と c 波が等しくなる水準[13,381]に近づきました。

波形的にも水準的にも第(ii)波はいつ終わってもおかしくありません。その後は第(iii)波の下落トレンドが続きますが、ひとたび第(iii)波が始まれば、そのスケールは第(i)波(28.7%下げ)を凌駕する大きさになるでしょう。



Bloomberg マグニフィセント 7 インデックス

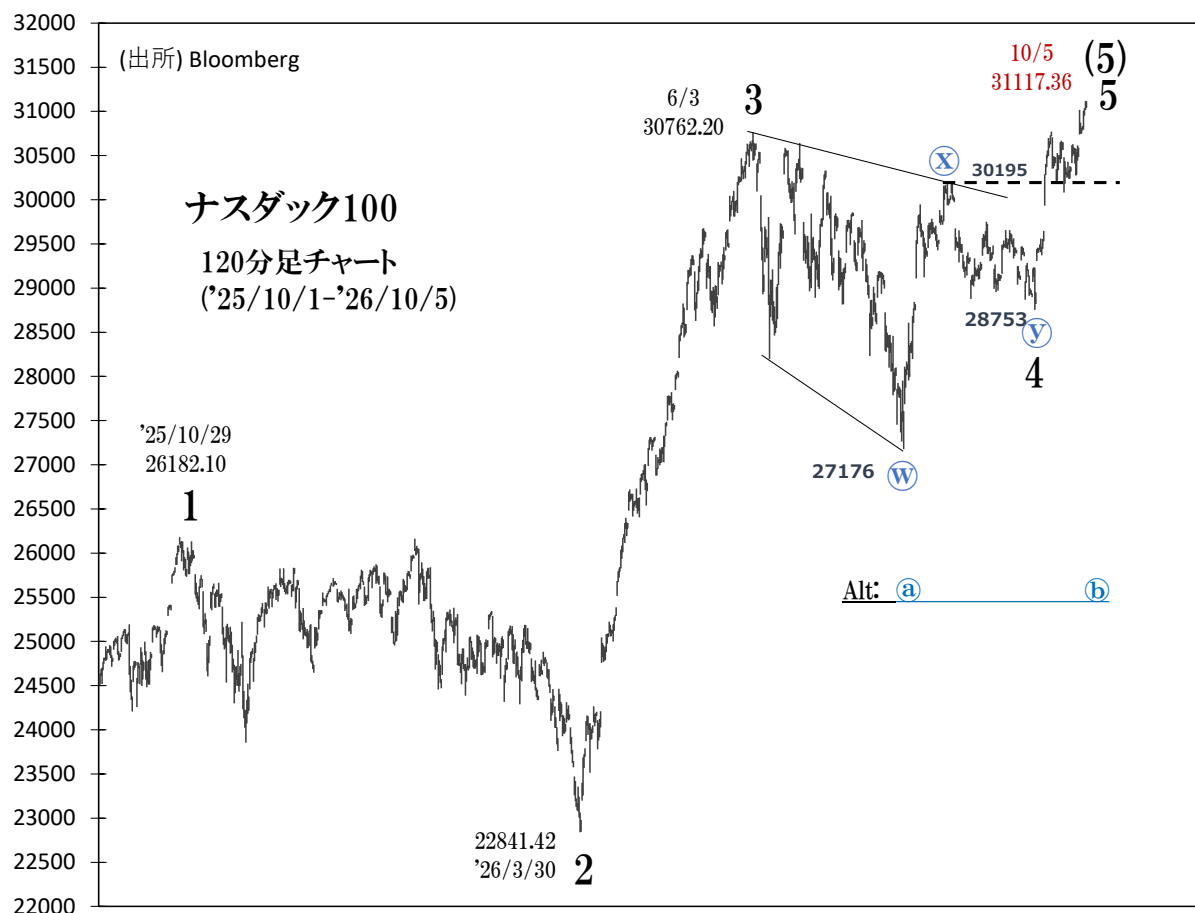
25 年 4 月安値からの上昇は「ウェッジ」天井パターンです。10 月 5 日に最高値を更新したため、9 月 22 日高値に天井を付けた見方は否定されました。もっとも、足元高値は天井パターン上限に再度達していることから、改めてマグ 7 のピークアウトを見極める局面となっています。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

25 年 4 月安値(16,542)から展開している上昇波は、インターミディエイト第(5)波に位置付けられ、そのうち 6 月高値からのマイナー第 4 波は、28,753(9/16 安値)で完了したと思われます。

マイナー第 2 波の「ダブル・ジグザグ」に対し、マイナー 4 波は「ダブル・スリー」を形成しました。

28,753 からの上昇はマイナー 5 波であり、その完成を以てインターミディエイト(5)波も完成します。終値が 30,195 を下回るようなら、それはナスダック 100 天井打ちの最初の合図です。

(オルタナティブカウント、Alt)

マイナー第 4 波は「フラット」であり、27,176(7/29 安値)からの上昇はマル b 波に相当します。

次のマル c 波による下落は 2 万 7000 処で底入れし、それを以て第 4 波は完成します。

その後、第 5 波による上昇が続くことになります。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在 1ドル=148 円程度です。

さらに、購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで 1ドル=97 円～103 円です。

短期的にも長期的にも、日本円の過小評価が続いています。

163.944 円(7/23)を以て通算 5 年間の円安①波[ウェッジ]は完了した、とみられます。ウェッジ内の副次波は、次のように相互に美しい比率を示しています。

(C)波の長さ÷(A)波の長さ=0.703、(E)波の長さ÷(C)波の長さ=0.703

この先は数年間にわたる円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7 月末の日米協調円買い介入は、円安の限界水準(160 円台前半)を明示しており、もはや積極的な円売りの動機は失われたといえます。今後は次第に円高傾向が強まっていくでしょう。

筆者は今後数年内(2028 年?)に、1ドル=120 円-125 円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80 円-160 円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

155.156 円(8/3)からの第 2 波「ランニング・フラット(マル a-マル b-マル c)」は、158.989 円(9/25)で完了した可能性があります。

そうであれば、強いドル安・円高波動(第 3 波)が近々到来すると想定されます。

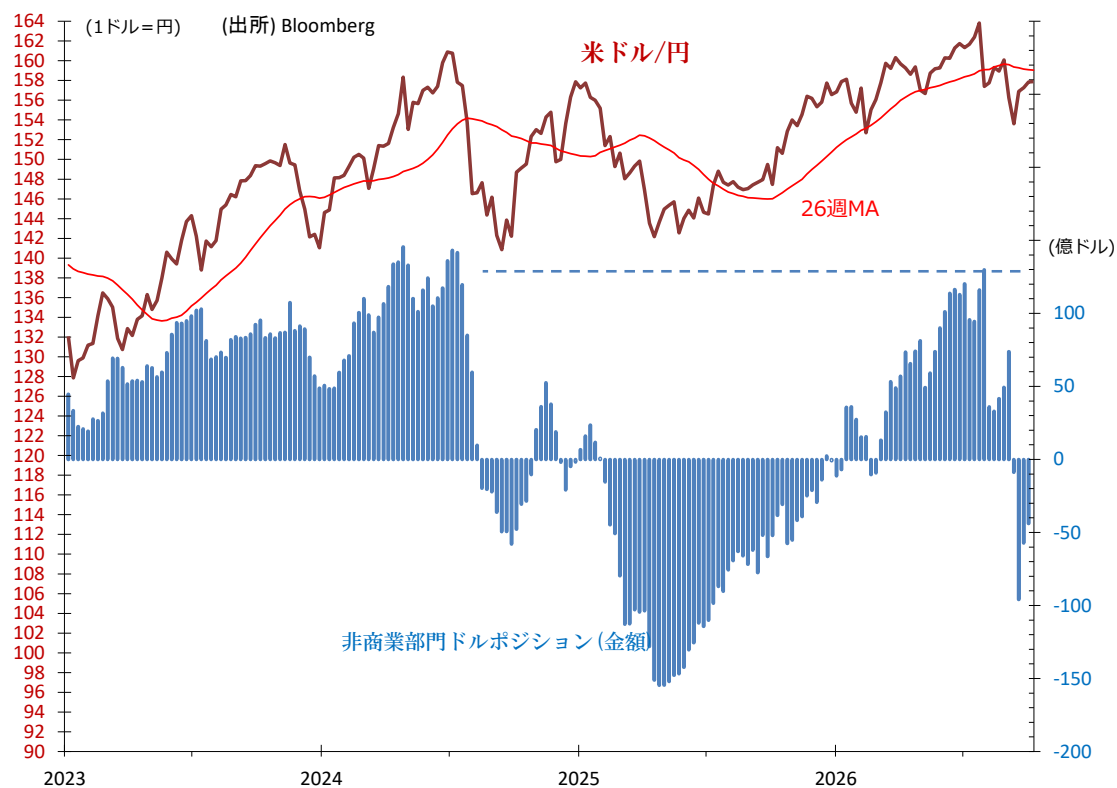
近々第 3 波は、「複合型ヘッド・アンド・ショルダーズ」のネックライン=152 円処を試すでしょう。152 円処は、25 年 4 月(139.577 円)からのドル/円上昇の半値戻り[151.910 円]に相当する上、今年 1 月 27 日の安値 151.994 円でもあります。

心理的節目の 150 円も視野に入り、その直下には 61.8%戻り水準[149.070 円]が控えています。

なお複合パターンに基づくターゲットは、①145 円-146 円、②141 円です。これらターゲットが、10 月末にかけて達成されるかを注目しています。

金利差からのドル/円推計値

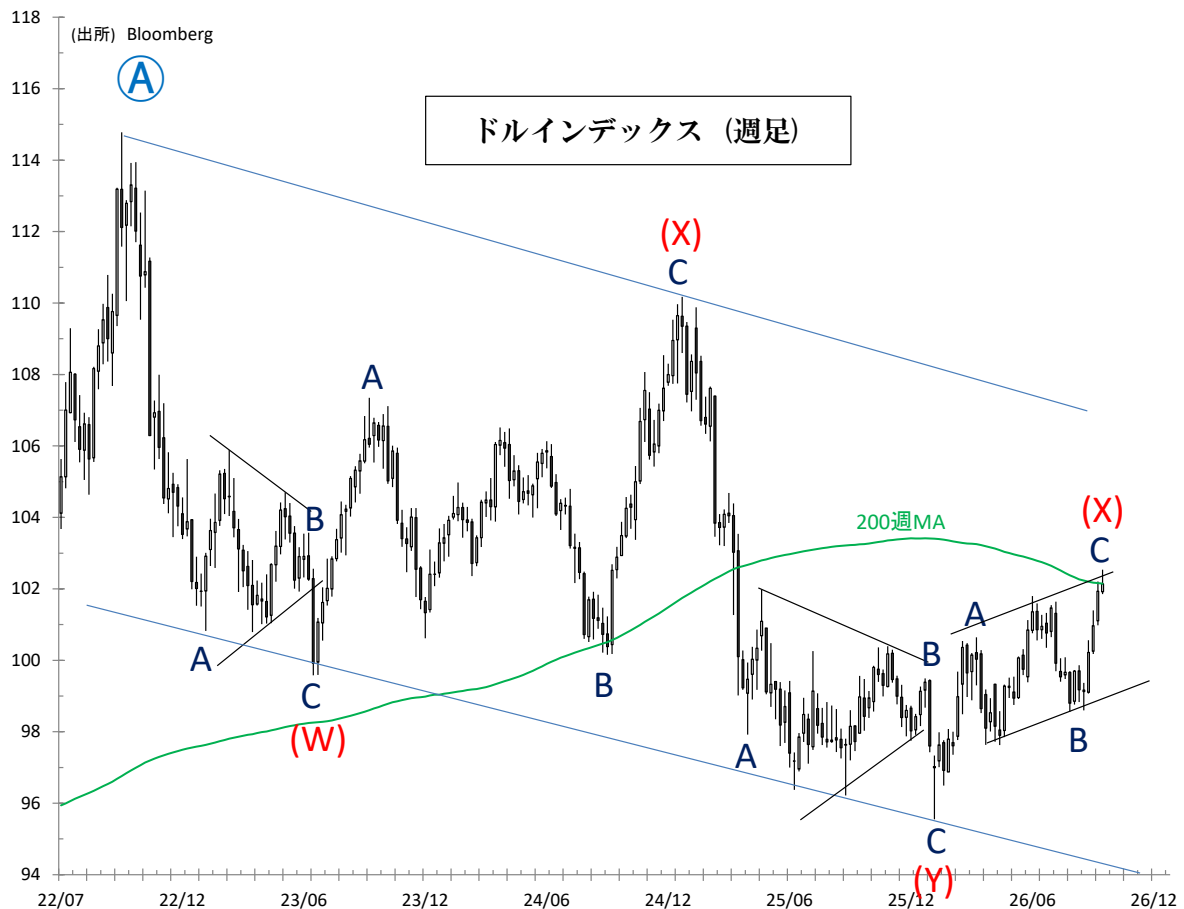
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[148.273 円]です。



円買い越しが2週連続で縮小 (2026年9月29日時点)

IMM 通貨先物市場で、投機筋(非商業部門)の円買い持ち高は、前週の57.20億ドルから63.90億ドルに縮小しました。円買い持ちの縮小は2週連続です。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

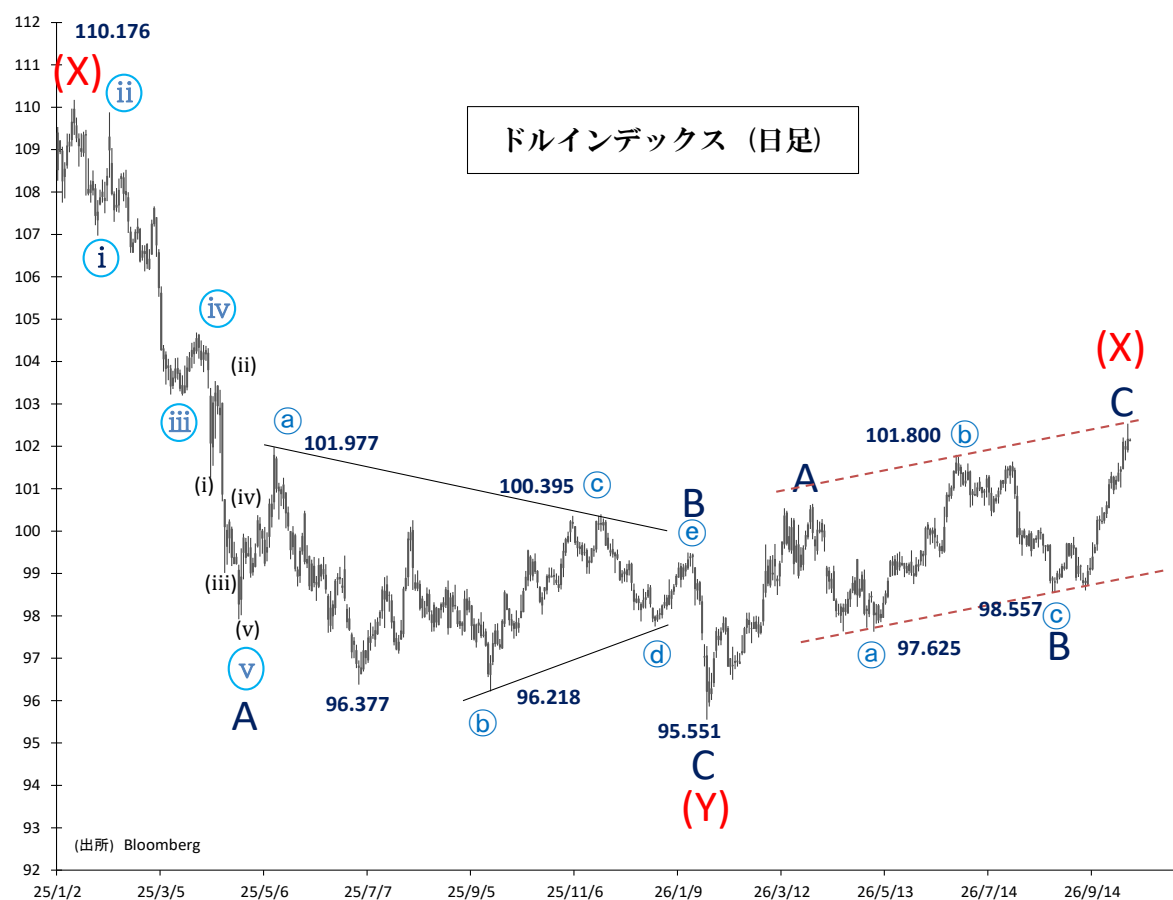
今年1月からのドル高(X)波はA-B-C編成ですが、そのうちB波が98.557(8/21)で完成し、以降のドル高はC波に位置付けられます。

水準的には200週MAをレジスタンスに、C波及び(X)波はいつ終わってもおかしくありません。この場合、ドル安トレンドが近々再開すると思われます。

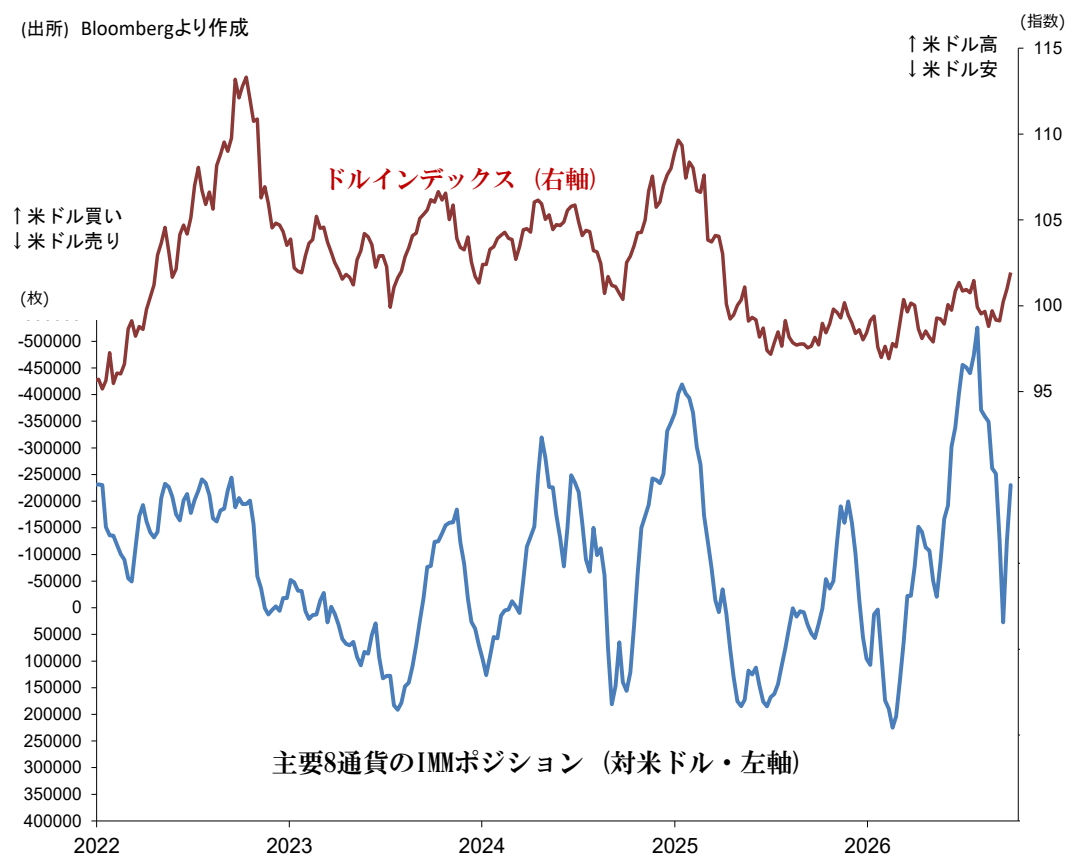
その反面、ドル高基調が続く場合は、(Y)波(25年1月～26年1月)の半値戻り[102.864]、さらに[103.654](A波とC波が等しく上がる水準)へ上昇余地があります。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は2週連続の増加(2026年9月29日時点)

投機筋によるドル合成ポジションは、ドルの買い持ち高が、前週12万5909枚から23万331枚へ増加しました。



(出所) Bloombergより作成



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア